

警察を疑うことができない人のために

# 日本最大の犯罪組織である 公安警察と公調を告発する！

公安の全面情報開示をすれば犯罪組織と変わらない実態が明らかになります。次の犠牲者はあなたです。公安(公安警察と公安調査庁)は国家権力による犯罪者集団です。

(佐野利昌)

【稲葉事件】 [警察の組織犯罪]

---

## (※1) 稲葉事件

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

稲葉事件 (いなばじけん) は、2002年7月に北海道警察の生活安全特別捜査隊班長である稲葉圭昭 (いなば よしあき) 警部 (当時) が覚せい剤取締法違反容疑と銃砲刀剣類所持等取締法違反容疑で逮捕、有罪判決を受けた事件である。

公判において、北海道警察による「やらせ捜査」や「銃刀法違反偽証」などの不祥事が明るみに出るとともに、北海道警裏金事件が2003年に発覚するきっかけともなった。

ウィキペディア (Wikipedia) 稲葉事件 (いなばじけん)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A8%B2%E8%91%89%E4%BA%8B%E4%BB%B6>

---

1. 『行間から立ちのぼる警察組織のすさまじい腐臭。これは、一北海道警察だけの問題ではない。』2003年9月初版の帯に書かれた佐野眞一氏の言葉である。

曾我部司著『北海道警察の冷たい夏—稲葉事件の深層』という渾身の書き下ろしで、出版当時はある程度話題になった本であった。

最近では**刑期**を終えて出所した稲葉氏本人の「告白本」が出版されているが、事件の背景の**客観性**とマスコミの**対応**も含め事件を俯瞰的に眺めている曾我部氏の著書のほうが**皮肉**にも**当事者本人**の「言訳本」よりも「稲葉事件」の**本質**を捉えている。

この事件が我々に提示した「問題の核心」が、稲葉氏の告白本の帯に書かれている覚醒剤の**量**や拳銃の**数**ではないことは事件のことを知っている人は皆わかっていることである(真実を隠そうとする勢力を除いてのことだが)。

2002年7月に発覚し翌年に判決が出ている事件を扱い、**この本**が世間に広まれば「**警察は持たない**」のではとさえ思わせる**内容**であり、公安(公安警察と公安調査庁)により「デッチあげられた**監視弾圧対象者**」である私も当時は他人ごとではなくその後の展開(**メディアがあらためてこの事件についてどう扱うか**)を注目していた。

しかし**出版**の2ヶ月後には「裏金問題」がテレビ朝日で**スクープ**され、さらに数か月後に北海道ではダメ押しのように原田氏が登場し「道警の裏金問題」を記者会見で語り始めた。全国の注目が集まり、連日「稲葉事件」の数倍もメディアに取り上げられ、日本全国「**警察の不正経理問題**」が話題の中心になり、名のあるジャーナリスト達も皆、**国家の一大事の如く**語り出し追求し始めた。そして警察が組織として立ちいかなくなるような「**様々な問題を孕んだ深刻な稲葉事件**」を隅に追いやり**矮小化**してしまったのである。

報道機関を代表とするメディアやジャーナリスト達が「**真実**」を追究し**常に**「**真相**」を暴くわけではないようだ。場合によっては、その内容によっては「**力のある側**」によりかかり、**見てみないふり**をし、**話題を逸らして**隠蔽に協力するようである。小さな事件を意図的に大きく見せるためにスクープ情報を提供して「**本当の巨悪**」の真相から目を逸らせたり、企業としてのメディアとなんらかの**取引**材料にする手法は昔から珍しくはない。

当時私は、警察組織がひっくり返るような「稲葉事件」よりもなぜ「裏金問題」なのか不思議に思っていた。**意図的**な「**問題のすり替え**」のような感じすらしていた。

「稲葉事件」とは2002年7月に発覚し2003年4月の「稲葉個人の犯罪」の判決で**表面上**は決着したかにみえる事件である。その詳細を知ってる人は全国的には**少ない**と思うのだが。もしそうだとしたら、警察権力がメディアを介しての「**情報操作**」に成功した、あるいは警察に**加担した**マスコミが徹底的な追及をせずにほかの事件や報道で国民の目を**逸らす**のに成功した**証**でもある。

刑期を終えて出所した稲葉氏本人の「告白本」が昨年10月に全国の書店に平積みされて、あるジャーナリストが「**感激**」?していたので当時と少し状況がかわったのかもしれない。しかし**当時**は稲葉事件の間よりも裏金問題の方に積極的だったはずだ。**不思議な光景**である。

## 2. ( 暴露本 ) **【警察の組織犯罪】**

2003年9月に出版された曾我部氏の「稲葉の絡んだ事件の**詳細な状況**」と**背景**を考察した**暴露本**の登場で、稲葉警部**個人の犯罪**での**決着**をもくろんでいた道警にとっては**致命傷**になると思われた。

この年には、警察にとっては触れてほしくないことが**てんこ盛り**状態の本が、織川氏、曾我部氏と立て続けに出版され、特に曾我部氏の著書の**全体のトーン**は稲葉個人の悪徳ぶりよりも北海道警察本部の組織犯罪、腐敗、隠蔽で貫かれ、当時の報道機関の**不自然な対応**にも言及している。

道警の**腐れ具合**が世間に広がりを見せ始め、北海道全体がよどんだ空気で覆われ何かスッキリとしない状況のなか2004年2月に「裏金問題の**大御所**」の登場である。

これを合図のように、マスコミも活気づき生きいきとして「道警の**かつてない大不祥事**」として「不正経理」を報じ追及をりはじめたのである。

あの発覚の**タイミング**を考えると、マスコミと警察がまるで示し合わせたかのように「**警察犯罪史上最悪の事件**」を、私には**目くそ程度**に思える小さな「裏金問題」にすり替えてしまったようにしか見えなかった。かつて1999年の**神奈川県警**の事件が警察犯罪としては史上最悪といわれていたが「稲葉事件」が警察犯罪史上最悪の事件であることは**誰の目**にも明らかである。

1999年に神奈川県警察本部外事課の**警部補**が覚醒剤を使用した事実を把握していたのに県警本部が組織を挙げて事実を**隠蔽**しようとした事件である。結局本部長や警務部長ら幹部9人が書類送検され、**本部長**ら5人の幹部警察官が執行猶予つきの**有罪**判決を受けた。

本部長と監察官室を支配する警務部長が中心となり事件を闇に葬ろうとしたのである。県警トップが罪証隠滅に関わり、監察官室は実は警察の組織防衛のために機能していることが明らかになったのである。

警察不祥事の中でも前代未聞といわれ最悪といわれていたが、その3年後に神奈川県警をはるかに超えることが北海道警察本部で起こっていたのである。

道警裏金問題では最終的に「裏金の流用分」を「北海道」に約2億5千万円返納しさらにその後「国」に国費流用分約6億6千万円を返納している。そして懲戒が98人で減給、戒告、さらに2,700人ほどが口頭注意、口頭**嚴重注意**等々で、懲戒といっても結局最も重いのが**停職1カ月**という免職なしの大甘処分である。人数こそ多いが皆で仲良く責任を分担しあって一件落着である。

元々が裏金問題など稲葉事件で露呈した警察権力の悪質さに**比べれば**その程度の事件なのである。

裏金問題報道をめぐる北海道新聞社と道警側の**名誉棄損**訴訟裁判において道新が道警の顔を立てるための「**手打ち**」をめぐる2006年10月にシンポジウムが札幌で開催された。パネリストは、一応原田宏二氏、大谷昭弘氏、宮崎学氏、田原総一郎氏、山口二郎氏となっている。大谷氏が実際に出席したかはわからない。

**実は**、このシンポジウムの内容が何年か前に検索した時と**内容が全く違う**記憶があるのだが、記憶違いか確認できない。・・・・・・・・・・?

**いずれにしても**これほどのメンバーが道警本部の近くの会場に集まって「語り合う」ほどの問題とは思えないが。

裏金問題関連での報道をめぐる場外乱闘で錚々たる面々が集まり国民の**注目**をそちらに(道警裏金問題が**さも**重大事件であるかのように)向けさせてるように私には見えたのだが。私の**邪推か?**

### 3. (なぜあの時期に) **【警察の組織犯罪】**

裏金など**何十年も前**から行われてきたことでどこの県警でも目立たないよう普通に行われていたはずである。

警察に限らず裏金と呼ばれる**公金横領**は日本の**あらゆる公的**機関で昔から行われている。個人の横領は別としても、**カラ出張旅費**や**カラ時間外手当**を請求しプールして歓送迎会や親睦会**等**の一部として本来の**目的外**に使われることは、公務員の世界では慣習のように昔から行われてきたことで特殊なことではない。「組織全体の円滑な運営のために公金を**便宜**的に使わせてもらった」程度の共通認識で罪の意識をもつ者はほとんどいないだろう。しかし犯罪であり悪しき習慣であることに変わりはない。

原田氏によると稲葉事件が起きた**原因**のひとつが裏金問題であると書いている。全く無関係とも思わないが、こじつけのような感じがする。直接に事件の**引き金**になっているわけでもない。**稲葉事件**は裏金問題とは全く「**別の次元の問題**」といってもいい事件である。数名の道警幹部が関与し二人の関係者が自殺(一人は変死)に追い込まれ、道警の**S**のなかに行方不明の者もいる。稲葉の犯罪集団と取引関係にあったロシアマフィアは韓国で射殺されている。

かなりインパクトのある事件なのだが当時のマスコミも積極的に追及したようには見えない**フシギ**な事件である。

一時期「原田氏の**部下**であった**稲葉**」の事件がなければ**裏金の告発**はなかったとも述べている。告発を決めた際に道警からの引きとめや脅しがあったそうだ。

稲葉に絡めて「稲葉事件の**闇**」から**世間の関心**を逸らせるにはうってつけの役どころで当時は**最適**の人物の登場だったかもしれない。

**ネット上**での巧妙な自作自演を見慣れすぎ、**協力者たち**の「組織的ストーカーに関する**嘘**」を散々**体験**してきた私は、社会的に立場のある人間であっても言ってることや行っていることを今ではそのまま素直に受け入れる事ができなくなっているのです。

警察官が組織ぐるみで公金を横領しているのだから事件であることはまちがいない。

私が**不審**に思っているのは、なぜあの**時期**あの**タイミング**で道警の裏金問題に**スポットライト**を当てなければならないのかということである。

やるんだったら「稲葉事件」の全ての闇を解明してからでもいいではないか。稲葉事件の**何年も前**からできたことではないか。錚々たるメンバーが集まって語るべきは、「**道警の裏金問題**」などではなく「**道警の稲葉事件**」ではなかったのか。

どこかの誰かさんも **とってつけたように**、裏金問題と一緒に稲葉事件をとりあげているが、稲葉事件などもう既にどこかに **吹っ飛んで**しまったようなものである。最近では **稲葉氏の告白本**に絡めて裏金問題との **辻褄を合**せているようだが **当時の状況**は全く違うものであった。

1年ほどのほぼ同時期に発覚し、北海道警察が **組織として関わった** 2つの不祥事「**稲葉事件**」と「**不正経理問題**」の重さを考えた時、マスコミが取り上げジャーナリスト達が追及すべきは稲葉事件の **背景の闇**ではなかったのか。 **組織防衛**のために都合の悪いことを **隠蔽**し闇に **葬り去る**警察組織の閉鎖的な体質こそがはるかに大きな問題だろう。スクープ番組による **裏金問題の発覚**、そしてそれを補強するようにダメ押しするような既に退職して傷つくこともない道警OBの **タイミングよすぎる**登場による「不正経理」の内部告発。

曾我部氏や織川氏の衝撃本の **出版後**に道警の「裏金問題」の唐突な発覚である。

「**肉を切らして骨を断つ**」という典型的で効果的な隠蔽工作の臭いがする。 **組織防衛**のためにマスコミをまきこんだ **大掛かり**で狡猾かつ巧みな隠蔽の **方法**ではないのか。

警察組織の痛手を **最小限**でくいとめるために、「稲葉事件」そのものを **矮小化**するためマスコミも側面から隠蔽に **加担**している **可能性**があることに気付いたとき(なぜ裏金問題なのか!)、 **当時**は私も背筋が寒くなったものである。

メディアが警察 **権力**の組織的な **腐敗を隠蔽**する側にもしも加担するとしたら(事件に消極的という意味である)、新聞社や特にテレビ局を始めとしたメディア関連 **企業の都合**によるものであろう。

警察官、教員もそうだが個人の性欲や物欲による犯罪や不祥事は「**人間なもの**」ある意味仕方のないことで、組織全体を考えれば **許容範囲内**である。警官が携帯のカメラで若い娘のスカートの中の **危険物を捜査**しても大きな問題ではない。被害者の個人情報に加害者に洩らしたり、個人のストーカー被害よりも「**宴会**」を優先しその結果被害者が **殺されても**まだ許容範囲である。メディアも警察の不祥事としてはりきって **徹底的に**追及するだろう。

しかし稲葉事件のようなケースでは違う。

警察組織全体が不正の元凶であるかのように著しくイメージ **ダウン**したり、ましてや複数の **幹部**警察官が直接関与し本部長以下が見てみないふりをしたり結果として警察組織が犯罪に関わっていたなどという事実は絶対に知られてはならないことである。



もしバレテも**最小のダメージ**にすべく巧妙な警察の組織防衛が始まり、メディアは「**慎重に**」様子を見ながら、警察の**顔いろ**を窺いながら行動するはずである。

たとえば、基本的に警察や国家権力組織関係 (FBI や CIA も含め) の主人公がヒーローとして描かれなければ、結局のところ映画、テレビドラマ、小説等が成り立たない。

刑事や捜査官はヒーローで、警察機関も正義を実現する組織でなければならない。

警察組織自体が**腐った組織**なら年間何十本もの民放各局の 24 時間警察密着のスペシャルといった警察の「**真面目な仕事ぶり**」を**宣伝**する警察**御用達**番組なども制作しずらいだろう。その意味でもこの稲葉事件は**警察側**にも**メディア側**にも両方にとってのやっかいな問題であったろう。

あれほど**インパクト**のある事件が、**巧妙な隠蔽**により**その詳細**が**なるべく全国的に**知られないよう矮小化して風化させてしまったのは、お互いに両方の事情を配慮したいわばメディアと警察の「**共同作業**」の結果である、と私は考えている。

#### 4. (裏金が重大?) **【警察の組織犯罪】**

冷静、公正に考えれば稲葉事件のほうがはるかに**深刻**な問題だと**皆**が思っている筈。そう考えた私の見方は偏っているのか。

嫌がらせや**脅迫**のなかでおそらく**命がけ**で取材、追及したであろう当の曾我部氏は、「北海道警察の冷たい夏」**出版後 2 カ月**ほどのタイミングで発覚した裏金問題についてどう思っていたのだろうか?

事件の数年後の**著書**の中で、私の数年来の**疑問**に答えてくれる一節を見つけた。

『その間にテレビ朝日の「ザ・スクープスペシャル」によって明らかにされた道警の**不正経理問題**もあった。**野心の上に正義をかざした人たちが鬼の首でも取ったかのように喜んでいる姿**を横目で見ながら、私は「稲葉事件」のその後を追いかけていた。』

曾我部司「**白の真実**」

大手メディアのお抱えのような評論家、一見権力側の批判を展開しているようにみえるのだがどこか白々しい有名ジャーナリスト達。「裏金問題」でなぜか**活況**を呈した**当時のマスコミの様子**を、冷静な口調ではあるが**痛烈**に皮肉っている。道警の**二つの**不祥事問題で

ジャーナリストたちが取るべき本当の「鬼の首」は、「稲葉事件の背後に広がる闇」の解明ではなかったのか。警察権力の鬼のような一面を暴き検証し告発することではなかったのか。

暴露本の出版による警察組織への影響の大きさを考え、あえて「裏金問題」を発覚させ国民の関心をそちらに向けさせたのではないのか。

著者もあのタイミングでの「裏金問題」の発覚に対しては違和感を感じていたように私には読める。

警察とマスコミの関係を示す話として、曾我部氏はこういうことも書いている。

『ある道警記者クラブに席を持つ記者が私にぽつりと話した。「この事件を突っ込んで取材すると、他社を抜く小ネタを拾えなくなるから……」』

正直に告白する記者がいることはまだ救われる思いがする。普通マスコミはこのような裏事情については正直に伝えないことが多い。

フリーである著者は当然取材に制約を受けるだろうが、警察記者クラブ所属の記者はまるで「無言の恫喝」をうけているようだ。警察側の意に反する取材は踏み込んでできない雰囲気になっているようである。しかしこれはマスコミ各社どこも同じで警察担当の記者が警察に餌付けされ子飼いのようになっているのは必然的で限界でもある。

「談合ジャーナリズム」の記者達に真相の究明を求める方がまちがいのだろう。彼等は警察の「大本営発表」をほとんどそのまま記事にするしかないようだ。

刑事警察でこの状況である。秘密警察である公安に関した事ならばいったいどういうことになるのだろうか。心配ご無用、公安警察にとって都合の悪いことなど初めから存在しないことになっているので報道の際に問題になることなどひとつもないのです。秘密警察の予算の本当の執行状況や捜査活動の実態がすべて非公開とはこういうことなのである。公安警察においては、仮に稲葉事件を凌駕する事件が内部で起こっていても表面化することは絶対がないので最初から隠蔽工作など必要ないのである。本物の「内部告発」があれば別だが。いままでも告発じみたことはあったが「公安警察の体制」に全く影響のないことばかりである。

刑事警察には一応「メディア」や「マスコミ」の「監視カメラ」がついている。機能していない事もあるが。しかし公安警察という権力機関には最初から「監視カメラ」がつけら



れていないので告発のきっかけすらない。つまりやりたい放題の野放し状態にあるということである。

## 5. (犯罪集団) [警察の組織犯罪]

稲葉事件当時の小樽や札幌周辺で中古車業を営んでいるパキスタン人の顧客の殆んどがロシアマフィアである。札幌市内やその近郊には正規の中古車業者は山ほどあるので怪しい胡散臭い外国人の店で怪しい中古車をわざわざ買う日本人は皆無である。

つまりロシアマフィアが主にロシア船員と商売するためにパキスタン人に中古車業をやらせているわけだ。

ロシアマフィアのフロント企業であるパキスタン人による中古車業者マリックと、「稲葉という警察官を頂点とした渡辺司、工藤、小山、石上、小林という道警のSたち犯罪集団」が、密接に絡み合うことでより強大な犯罪集団を形成していた。彼等Sたちの前科の合計は8犯になる。

稲葉が主に使っていたSは5人であるが全部で20人以上いたと公判で稲葉自身が証言している。稲葉だけではなく生活安全部が銃器と覚醒剤の摘発のために「捜査協力者」として暴力団関係者を常時13人ぐらい(途中で服役の者を除く)は使っていたことになる。

「恥さらし」のなかでは密接に付き合っているSは常に10人ぐらいいたとも稲葉は語っている。

この稲葉を頂点とした犯罪集団は小樽港に寄港したロシア船船員を通じてロシアマフィアから覚醒剤や拳銃を仕入れる。

そしてその覚醒剤や拳銃をS(捜査協力者)に密売させ、その売った先を稲葉が検挙する。

Sは4人であり稲葉が拳銃押収で並はずれた実績を挙げたカラクリのひとつである。

逮捕の数年前から稲葉は覚醒剤の使用だけでなく直接自ら密売もしている。

Sを使うようになってから稲葉は道警からの毎月の給料をまるごと別居の妻に渡し、覚醒剤や拳銃の密売取引で得た金は自身の生活費やSたちの面倒をみる経費として使っていた。

年間600台以上の盗難車をロシアマフィアに売り、支払いが全て現金ではなく時には北朝鮮製の覚醒剤やマカロフなどの拳銃や密猟カニで支払われる。

渡辺たち S の仕事のひとつが代物支払いされた物を換金するために売りさばくことである。

そして、カニ以外の「覚醒剤」や「拳銃」を買ったものたちを検挙するのが稲葉の仕事であり、事件を造り上げて実績をあげていたのである。

渡辺は盗難車を小樽港に移送してマリックに引き渡し新潟港や留萌港などに持ち込まれる覚醒剤や拳銃を引き取って運ぶという最も危険な仕事もさせられている。

ロシアマフィア関係者によると、稲葉の逮捕後にパキスタンに逃げたマリックは小樽港の税関職員から埠頭を閉鎖しているゲートの合鍵を受け取っていたという。その見返りに密輸出した車一台当たり数万円をマリックたち犯罪集団は税関職員に支払っていたという。小樽港や石狩湾新港は事件捏造とおとり捜査の舞台となり、盗難車や拳銃や覚醒剤の密輸をめぐって警察、暴力団、ロシアマフィアさらには税関までもが入り乱れて犯罪の秩序が構築されていた。

1997年11月に小樽港の岸壁付近で張り込んでいた道警銃器対策課の捜査員たちによってアンドレイというロシア人船員が現行犯逮捕された。逮捕容疑はトカレフと実包16発を持ちこんだ銃刀法違反、所持である。

この拳銃押収事件は、道警と稲葉と S (捜査協力者) であるマリックとその従兄弟のハンザフルと渡辺司の事前の綿密な打ち合わせにもとづく捏造事件である。

拳銃1丁と嵌められた「人身御供にされた逮捕者一人」の目立たない事件なのだが道警が組織的に仕組んだ捏造事件の中でも象徴的な事件である。

『この事件のポイントはロシア人の拳銃所持事件を立件するのと引き換えにパキスタン人たちは盗難車の密輸を道警に許されていたということだ。しかも税関を通さずに船に積み込むというやり方で。』

公判でアンドレイの国選弁護人はハンザフルとマリックを利用した道警の違法な四捜査であるということを一貫して主張し続けた。

三人の警察官(方川、千葉、稲葉)は検察官の了解の上、法廷で偽証し、検面調書においても S たちに虚偽の供述をさせている。札幌地検の検察官も共謀していたということだ。

警察官を証人として法廷に出廷させる場合、銃対課長や生活安全部長などが検討会を何度もやって本部長までの決済を仰ぐという。

結局アンドレイは、道警銃対課の幹部警察官や稲葉の偽証により捏造事件の犠牲になり懲役2年の実刑判決を受けている。

後に稲葉は死んだ方川一人にすべての責任を押し付ける幹部たちの態度に怒り、獄中から幹部たちを告発しアンドレイ事件の詳細を証言している。

2000年に「泳がせ捜査」の名目で道警銃器対策課が主導し函館税関の協力で石狩湾新港に荷揚げされた違法薬物は、1回目は香港から覚醒剤130キロ(40億円)、2回目はシンガポールから大麻2トン(60億円)である。

S(元暴力団幹部石上)の計画と関東の暴力団の話にのった道警銃器対策課と函館税関小樽支所が画策したことなのだが、つまり暴力団と警察と税関がコラボレーションし「泳がせ捜査」の名のもとに大量の違法薬物を密輸入したのである。

これらは拳銃200丁を中国人に密輸入させて身柄つきで200丁もの銃を摘発するために、大量の拳銃が欲しい道警の銃器対策課が大量の覚醒剤、大麻が欲しい暴力団と手を組んで画策実行したことである。

「泳がせ捜査」といえば聞こえはいいが、銃対課の数字の実績を上げるためと、警察庁からの1丁あたりいくらという予算をとるために海外から大量の銃を手に入れるための捜査であるから、最初から道警主導の単なる「拳銃の密輸入計画」である。

道警の幹部たちが暴力団に調達を依頼した銃を密輸入するために、その見返りとして先に暴力団側側に覚醒剤と大麻を与えるために道警が先頭に立ち税関もグルになって違法薬物を密輸入したのである。

最終的に「覚醒剤」は暴力団を手玉に取り失踪した道警のSを介して、「大麻」は関東の暴力団を介して国内にすべて流通させてしまったのである。拳銃200丁の話は暴力団と道警をだしぬき覚醒剤をまんまと手に入れて失踪した道警のS(元暴力団幹部)の「架空のハナシ」だったのである。

何の成果も得られず、税関に2回も大きな借りをつくった道警はその恩に報いるために2001年さらに新たな事件を捏造した。ロシア船に拳銃を仕込み、それを函館税関小樽支所

に摘発させたのだ。常時**数十丁**の拳銃が**手元にあった**稲葉がそのうちの**20丁**を提供しロシア船に仕込み税関が押収したのである。

稲葉氏の証言による道警銃器対策課の非常に**悪質**でかつ**間抜けな**事件なのだが、稲葉事件が発覚しなければもともと表面化しなかったことでもある。

警察と暴力団との昔からの「**緊張関係**」と同時に「**信頼関係**」を考えると、全国の警察で表面化していない**類似のケース**(**内容**や程度は違うだろうが)が相当あるのではないか。

稲葉事件が発覚した**あと**摘発できる情報を持っていても敢えて暴力団やマフィアの**小樽港**での**ビジネス**を野放しにし、道警が手を下さなかった理由は**適正な捜査**をすれば稲葉事件の規模が**拡大**してしまうからである。

**税関**や道警の**不作為**や**関与**を**立証**してしまう捜査はあえてしないのである。

小樽港での**でっち上げ**事件や**違法**捜査に関わった税関職員は稲葉事件の陰に埋もれてしままったく**追及されていない**。事件発覚以後に**税関職員**の人事異動がさかんに行われたという。

2001年の**大阪府警**による札幌発大阪着のトワイライトエクスプレス号の個室での10丁の拳銃押収事件は**稲葉**がパキスタン人を經由してロシアマフィアから仕入れ、**渡辺**が暴力団組員に売った拳銃だった。その銃を組員が空路で先回りし「**京都駅**で回収」の予定が手違いで客室に鍵がかかってしまい入れなくなった組員が取引した銃を回収できず、そのまま逃走した。後に暴力団組長と組員13人が逮捕されている。

実はこの事件にも裏があり、道警が自分の**管内**で押収すると渡辺たち**S**が危険にさらされるのと、稲葉を頂点とする「**事件捏造システム**」がバレるのを防ぐために**道警の銃器対策課**が大阪府警の銃器対策課にあえて**情報を提供**した結果である。

この事件では稲葉以外に渡辺たち捜査協力者を**動かしていた**警察**幹部**がいることを示唆しているが稲葉自身の告白によればトワイライトエクスプレス事件での関与も**強く否定**している。それが事実とすれば**別の銃対課**の道警**幹部**が**S**を使っ**て**の拳銃の**密売**に深く関わり**直接犯罪**を指示していたということになる。

ある**大阪府警**の関係者によると、家宅搜索の時に組事務所から「**〇〇県警に〇丁**」という走り書きのメモが押収されていたという。

2001年のことだが暴力団が警察の注文を受けて拳銃を手配していた可能性を示している。道警だけでなくどこかの県警も拳銃の押収実績づくりのために暴力団に依頼して拳銃を調達していたのではないか。

「そんなことがあるわけがない。」と常識的には一笑に付される想像なのだが、笑いながら顔が引きつりそうである。

## 6. (もう一冊の「稲葉事件」) 【警察の組織犯罪】

当時もう一冊「稲葉事件」を扱い、本としては曾我部氏より2カ月早く著者の勤務する出版社ではなく講談社から出版されている、織川 隆(ペンネーム)氏『北海道警察 日本で一番悪い奴ら』がある。

警察を「信じて疑わない人」や「想像力の欠如した人」には信じがたいタイトルかもしれないが、正しいタイトルである。「事件の本質を考えればタイトルから「北海道」を削除してもいいだろうと私は思う。

犯罪を取り締まる機関がその権力をバックにして重大な組織犯罪を犯していたのだから、その犯罪の規模と隠蔽の小細工からもみても当時の道警は「日本で一番の悪党」であったことは間違いない。数名の幹部たちが自ら説明することなく逃げきりめでたく定年を全うしたことを考えると、現在の道警もいまだに悪党の影を引きずっているのかもしれない。

この本を積極的にとりあげなかったのは、稲葉事件の重要な証人の変死についての検証、考察が少なかったことや稲葉事件に対する当時のメディアの消極的な対応の状況がほとんど書かれていないし、道警だけの問題ではなく全国の警察組織に共通する問題である可能性についてもまったく触れていないからである。

証人から元妻への10通の手紙全文の内容がそのまま掲載されている。渡辺の怪死を検証する重要な資料になるはずである。この様な手紙を全文そのまま掲載する目的は疑惑の死を検証するためなのだが、親族の言葉だけで積極的に検証がされていないように見える。曾我部氏はこの渡辺の手紙が先入観や予断の原因になるとしてあえて掲載していない。生前の悪行が死んだことによって消えるわけではなく、遺族の側の身内への思いによるある種の「美化」を排除するためである。



この本で特に気になる事件の闇のひとつ「証人の死」に関してだが、遺族の側による「司法解剖」の申し出を拘置所側は許可したのだが、遺族側がやらないだろうとみていたか、もしそうなった場合でも拘置所側は「事前に抜かりなく」対応する可能性もあるので、「司法解剖を遺族に許可したこと」が自殺と判断する根拠にはならないと私は個人的にそう考えている。

織川氏が拘置所側の立場を代弁しているようにさえ見えてしまったのだが。

「公安さん」に様々な場面で小細工をされ虐められ続けて、物事を疑ってかかるクセがついてしまった私はつつい考えてしまうのである。

「全国の警察組織が共通して内部に抱えている問題を稲葉一人と道警だけの責任(実際には責任らしい責任をとった幹部は一人もいない)で一件落着させる、まさか「警察」という組織そのものを守るための手の込んだ後方支援の本ではないと思うが。」

数年後に出版された関連本のタイトル「極悪警部— 金・女・シャブと警察の間」を見てよけいにそう思うようになったのだが、私の考えすぎ、深読みしすぎかもしれないしあるいはただ単純に著者の掘り下げ方が浅いのでそう見えるのかもしれない。

私の読み間違いならば、かえって歓迎すべきことで、私の置かれている立場からも警察の真実(秘密の公安警察)を白日のもとに晒してくれる一人でも多くの「アンタッチャブル」に切り込む真のジャーナリストの登場を誰よりも願っているのだから。

ちなみに本のタイトルだけは公安(公安警察や公安調査庁)の悪質さに鑑み私のブログのタイトルの参考にさせていただいた。

最近「外事警察 その男に騙されるな」という日本映画が公開されるようである。公安警察を過激なタイトルで告発している人間はほとんどいないので私のことを匂わしているのかなと思ってしまう。「その男」というのも気になる表現である。なぜ「あの男」ではダメなのだろう。「私」S・Tの苗字を知っている人は何かを感じるかもしれない。被害妄想になるのでこれ以上は言わないが。もちろん内容は別の話だろう。

善意の協力者が多数登場するそうなのだが、組織的なストーカーの最大のポイントも「協力者」であり、協力がなければ組織的なストーカー犯罪は成立しないのである。

外事3課の仕事ぶりは「漏洩事件」で都合よく広く知られる事となったが、真実はドラマや映画で描かれるような公安にとって都合のよいきれいごとだけではない。



国内での活動は単純な監視活動などではなく積極的な犯罪行為が蔽然としておこなわれている。公安(特に公安調査庁)が危険団体の情報収集や調査が仕事のようなイメージができあがってしまっているが大きな間違いである。世間で思われているよりもかなり積極的な機関のようである。

邦画はもうあまり観ないがサブタイトルが気になったのでついとり上げました。

制作する必然性もない映画で、主役を「大根」が演じている公安警察御用達の映画がヒットするはずもなく、私なら金をもらっても観ない。

どうせ「おすぎ」が何年か前に言っていた「ゴミみたいな映画よ～」が邦画界にまたひとつ増えることになりそうだ。

私の言うことが嘘かホントかレンタルになったら確認するのもひとつの方法です。

ただ世の中には変わり者がいて脳みその回路が一部ショートしているのか、ゴミ映画にも感動するバカタレもいるので。。。。。

私個人としてはお金と時間の無駄だと思うのでお奨めしないが。

◀ やはり1週間でゴミになったようです。ご愁傷さまです。 ▶

暴力団と渡り合うには対等かそれ以上の剛腕刑事でなければ務まらないだろう。ニュースなどでも容疑者連行の場面でどちらが暴力団かわからないごっつい顔の強面の刑事をよく目にする。覚せい剤の常習は珍しいだろうが暴力団関係の情報を得るためにも、「信頼関係」を築き持ちつ持たれつになっている稲葉と同類の刑事が全国にゴロゴロいるはずなのは容易に想像がつく。

確かな情報を得るために警察組織としての目益しや犯罪と変わらない裏取引がなければ拳銃や覚醒剤など暴力団組織が絡んだ事件の捜査はやっていけないかもしれない。稲葉に道警幹部の黙認や不作為による目益しや暗黙の了解の有形無形の協力があったように。

著者も指摘している。『暴力団と警察の関係はGHQの日本進駐時代から密接であり、闇市からのし上がった「愚連隊」が「レッド・ページ」のために利用されていた時代から脈々と続いている。』 『全国の警察組織と暴力団がある程度の癒着構造で結ばれていなければ、とっくにヤクザという言葉は死語になっているはずだ。』

既に施行されてる「暴力団対策法」も表面上の数字では効果があったように見える。しかし**実態**は暴力団員が組員を名のらず**顕在化**してしまい、見えづらくなっているだけである。

昨年も「暴力団排除条例」が全国で施行されたが、暴力団による**犯罪**は形態を変えて一定の規模まで減少するように見えるが**消滅**することはない。

暴力団関連の法律も**改正**する前に最初から厳しい法律にすればよさそうなものだが、掛け声ばかりが目立ちこの先暴力団が**壊滅**することはないだろう。

そのうち生き残りをかけて表向き組に所属しない一般人と見分けのつかない髪の毛を**七・三**にきちんと分けた地味な**会社員ヤクザ**が主流になるかもしれない。

## 7. (すべての始まり) **【警察の組織犯罪】**

ここでは**主に**曾我部氏の著書を参考に「事件」の間と警察という権力機関が何を**どこまで**でき、何を**行うのか**その**要点部分**を紹介しよう。10年前の事件で現在の**スピード感覚**では古い話になるが決して**風化**させてはいけない事件のひとつである。

かつて警察犯罪**史上最悪**といわれた神奈川県警の事件が1999年にあったが、「稲葉事件」はそれを**はるかに超える**事件である。

ノンフィクション界の巨人が指摘したように、誰が読んでもまさに「**すさまじい**」という言葉でしか表現できない衝撃的な内容である。暴力団関係者や捜査協力者周辺、**稲葉や幹部達**のやり方に**疑惑**と**不信感**をもつ100人以上の**現役**警官やOB達への地道な取材に基づいた内容でもある。

2002年7月5日稲葉警部の**捜査協力者**「渡辺(邊) 司」が覚醒剤を持って札幌市の**北**警察署に現れた。

尿検査による「陽性反応」は出なかったのが単純に覚醒剤**所持**による現行犯逮捕であるが、

その覚せい剤は**稲葉**が所持し注射や吸引で使用しているものである。渡辺はこの時はまだその事実を明らかにしてはいない。

そもそも稲葉とは親密な渡辺が**暴走**をはじめたのは渡辺の借金と借金に絡む稲葉と交わした**借用書**をめぐる感情の行き違いが発端である。このとき稲葉は覚醒剤で既に「**壊れはじ**

めていた」。その事もあり、渡辺は稲葉との「捜査協力者の関係」から、足を洗うつもりであった。

借金がからんだ暴力団の「追い込み」を稲葉と道警側がけしかけたと勘違いし迫りくる暴力団の影に「消される」と思った渡辺が生き残る手段として警察に駆け込み、稲葉と道警幹部の不正や道警組織の「ヤラセ捜査」「おとり捜査」を公の場で全てを話すつもりで、捨て身の出頭を企てたのである。

自分と稲葉があれば道警の捜査に貢献し幹部たちを出世させたのに、なぜ切り捨てられなければならないのか。北署に向かったのはその思いもあったようである。

当時の小林北警察署長は1997年に銃器対策課長を経験した後に異例のスピードで警視正まで出世している。渡辺の密告による銃の押収や稲葉の逮捕者なしの「首なし拳銃」の異常な押収実績のおかげである。

渡辺は北署の留置所で「小林署長を出せ!」と喚いているが直接抗議する意味もあるのだろう。

「消される」という恐怖にかられていた渡辺は北署に向かう当日車中から携帯で知り合いの警官、記者、方川氏、元妻、暴力団関係者等に「これから実行することについて」数件電話している。これは自身が闇に葬られないために渡辺なりに考えた、証拠を残す安全策だったのではないかと感じる。生きることや道警に対しての強い執念が感じられる。

後に曾我部氏は稲葉事件が発覚するきっかけとなった渡辺の自爆テロともいえる突然の出頭についてこう結論づけている。

『「弟のように可愛がっていた」と言いながら公判で号泣するくらい稲葉に思われていた渡辺であっても、稲葉を脅迫し彼から二〇〇〇万円以上の金を引き出していたという。それ以外にも渡辺はNやMという人物などからも多額の借金をしていたことが後でわかった。ひとつの犯罪秩序の中で生計を立てていた者が借金に追われ、その現実からの逃避と自己の正当性を主張するために、稲葉と北海道警察を矢面に立たせようとしたことがこの事件の端緒だったということをおぼろげに忘れてはいけない。』

この日渡辺が北署に出頭して逮捕されなければ、稲葉個人の犯罪も稲葉と渡辺や石上を中心とした多くの「事件捏造」や直接間接に関わった道警の幹部たちによる不正や犯罪も表面化することはなかった。

結局「稲葉事件」は**なかった**ことになり、そして今も警察権力の威信を保ち続けて北海道警察は市民から**信頼**され頼りになる存在であったはずである。

もっともこういう事件があろうがなかろうが、「警察を**盲信**」している市民が大多数なのだが。

警察犯罪史上最悪の事件がほんの**些細な偶然**で表面化しただけである。北海道警察の内部の状況はあの当時は**あのようであった**のだが、では他の**都府県**の警察本部はどうなっているのか。**今のところ**表面化していないというだけのことではないのか。その可能性が全くないとは言い切れないのではないか。もしも道警のような事態になれば既にもっと**上手に隠蔽**しているだろうが。

「**一北海道警察だけの問題ではない**」という佐野真一氏の指摘は警察という**権力組織の構造**はどこも同じで、他の府県警、警視庁はいつでも「**道警になり得る**」あるいは既に「**道警状態にある**」ことを示唆している。

多額の借金が絡んだ感情的な行き違いによる道警の捜査協力者の**自爆テロ**により**たまたま**稲葉事件が**発覚**しただけのことである。これがなければ、道警の幹部たちは「稲葉警部の**シャブ中**」が公にバレル前に「**体調不良**」や「**自己都合**」で休職か退職させ穏便に内部処理したであろう。遅かれ早かれすでにその段階にきていたのが**渡辺の暴走**によりその筋書きが崩れたのである。

道警のS渡辺の**借金問題**をめぐり稲葉も道警**幹部たち**も軽くみていたのがそもそもの「始まり」のきっかけである。

私の**個人的な考え**ではいずれ暴力団に**消され**闇に葬られる**運命**であったのを一部の道警幹部も知っていてあえて傍観していたのではないか。それが消される前に**先に**駆け込まれてしまって警察の対応が**後手後手**になったのではないか。協力者が内部告発するようでは最初から使えない。協力者が「警察」を裏切って証言をすることはありえず、今までもなかったことで**想定外**のことが起こったのである。

さらに渡辺の北署への出頭がなければ1年後の「道警裏金問題」の発覚はおろか「不正経理」など**存在すらしていなかった**はずである。暴露本の出版により「**闇**」が露呈した稲葉

事件そのものを隠蔽、風化させるためにあえて「発覚」させたのだから。私の個人的推測ではあるが。

## 8. ( 逮捕 ) [警察の組織犯罪]

逮捕の翌日には、なぜか渡辺の身柄は東区苗穂の札幌拘置(支)所に移送され、さらに警察の意図的な不作為か渡辺の黙秘によるものかは不明であるが(織川氏の本では黙秘と断定)警察の供述調書が作成されない中、札幌地裁の判事による勾留質問が行われたのは逮捕から2日後の7月7日である。

警察や検察に握り潰されずに、どうすれば判事の前で事実関係を話す事ができるか助言した人物がいる可能性を示唆しているが、逮捕歴のある渡辺は捜査の流れを知っているので最初から判事の前での発言を計画していたのではないか、そしてその計画に一枚かんでいるか、あるいは最後のひと押しをしたのがT警官なのではというのが著者の考えである。

渡辺が稲葉のS(捜査協力者)として多くの「事件捏造」を仕組んでいたことを知っていた道警内部の警察官たちもこの時点では渡辺が「稲葉と道警」を裏切る爆弾発言をするとは誰も考えていなかった。渡辺が逮捕された際、覚醒剤の出どころを一切話してないからである。

彼は警察が組織力を駆使しても隠蔽できないよう、警察や検察の力が及ばない裁判所の判事の「勾留質問」に答えるかたちで、彼の目的である「稲葉警部個人の犯罪」と「北海道警察の組織的犯罪」を公の場(判事の前で)に晒す事が一応できたのである。

判事の前での渡辺の発言をきっかけに稲葉はその3日後に逮捕されるのだが、家宅捜索は1週間以上も後からで、しかも稲葉の主たる居住先のマンションは20日以上も経ってから捜索している。道警にとって都合の悪いものが出てきたらまずいので共犯者に時間的猶予を与えたのである。この時点では推察される共犯者が実際にいたかどうかは明らかにはなっていない。信じがたいことに家宅捜索をしたのが道警本部の薬物対策課や、銃器対策課など生活安全部の捜査員たちである。証拠隠滅や共犯者の隠避が疑われてもしかたのない状況である。

ガサ入れで押収した覚醒剤は報道では93gであるが、著者もウラはとってないが信憑性のある現役警官からの逆タレ込みでは1.2kg押収したそうである。



稲葉自身も逮捕前のアジトに現金と 700g の覚醒剤があったと証言しているが、結局うやむやになっている。

100g で末端価格が 600 万円、使用分量は 4000 回分。93g だけでも幹部警察官による「覚醒剤の密売」が導き出される。

道警は当初事件を意図的に小さくするために、渡辺の「覚醒剤所持」と稲葉の「覚醒剤所持、使用」を全く無関係の別の事件として扱っていた。渡辺の調書の作成段階から意図的な隠蔽作業が始まっていたのだが、稲葉が逮捕されてからはなりふりかまわぬ隠蔽工作である。

覚醒剤の押収量も当初は 0.44g と監察官室は発表していたが通信社の記者に追及されて隠しきれなくなって公表したのが 93g で、「使用」と「密売目的」では幹部警察官の犯罪としての悪質性が全く違うのである。

問題なのは覚醒剤の量などではなく、マスコミが察知しなければ発表しない、既に知られている情報は発表するが、知られていない事実は事件に関連した重要な事でも自らすすんであえて発表しないという道警の姿勢である。

逮捕された稲葉の供述調書もあまりにお粗末で支離滅裂であった。『隠蔽しなければならないほど、警察組織全体に影響をおよぼす大変な事態になっていることを道警の幹部たちが承知していなければこんな調書は作成されない』とある。

泥棒の仲間がその泥棒の調書を作るようなものだから当然信用できない内容であろう。

覚醒剤の押収量の隠蔽も通信社の一人の記者の猛烈な取材で明らかになったのだが、気になるのは「小ネタ」のために無関心を装う他のマスコミの姿勢である。

『警察という強大な権力機関の事実隠蔽に対してマスコミ各社は牙をむくどころか、より穏便な方向へと向かっている。』『各社の反応はあまりにも寛容でおとなしい』『マスコミ各社は敢えて道警に騙されている』と著者は表現している。

この事件の発覚の際の地元紙の扱いはどうなのか。

2002 年 7 月 10 日道警生活安全部特別捜査隊の班長である稲葉警部の覚醒剤使用が発覚の際北海道新聞の一面は鈴木宗男が幹旋収賄罪で起訴されたことであり、稲葉の事はかろうじて社会面の一面で報じられている。



ほとんど北海道のローカルな事件扱いで新聞報道の扱いは予想外に小さかった。

また日本ハム球団の本拠地が札幌ドームに移転が決まり記者会見が札幌ドームで行われたのも稲葉警部逮捕の日だった。

偶然なのか意図的に報道する記事の選択をしたのかはわからないが道民の関心の高いニュースが同日に集中している。北海道でさえこういう報道のされかたなのだから北海道以外では当時はこの事件のことを知らない人がほとんどだろう。

現役警部宅から「覚醒剤 100g 押収」の報道で道警本部が激震していた日、警備畑出身の上原美都男道警本部長は夏季休暇の知床旅行中で最後まで休暇を全うした。

この本部長、後に辞任することになるのだが稲葉事件が理由ではなく 2003 年 7 月の天皇の北海道行啓の際の警護で「御召車」へのイカレタ男が車で突進した際の白バイの接触事故が原因で辞任したのである。稲葉事件では最高責任者でありながら警察庁長官による訓戒程度の処分済んでいる。

## 9. (モンスター) 【警察の組織犯罪】

昔の事で今はそんなことはない、あるいは特異な人物の特異な事件という人もいるだろう。「事件」の事すら知らない人がほとんどかもしれない。では今過去の事件にすぎないと考えている人は当時は「警察」をどう考えていたのだろう。あの事件が表面化していない時点での話である。見えないところでは道警はとんでもない事態になっていたのにノー天気な市民は今も昔も警察に全幅の信頼を寄せていたのである。

稲葉事件当時も公安の協力者たちは私の訴えることよりも犯罪集団公安のいうことを信じるのである。

今現在だって表面化していないだけで「道警稲葉状態」の県警があるかもしれない。私のまわりでも協力者を含め、それでも決して「警察」を疑うことをせず「ケーサツ」をありがたく頭から信じている想像力の欠如した、無知な「いなかモン」ばかりである。

警察や警察官の不祥事は年間に山ほどある。大きな問題であり由々しき事態である。しかしまだ許容範囲内である。「人間なもの」。

本当の問題は警察がその権力を背景にして組織的に犯罪を行っていることだ。

私は公安(公安警察公安調査庁)を口汚く罵っているがそれでも相当**控えめ**である。国家権力がやる事は警察ときいただけでなんでも協力する**おめでたい**市民の想像を超えるものである。

私がやられている組織的なストーカー行為は、単純な**偶然**を装ったものだけでなく説明しても信じてもらえず、体験者にしかわからない説明困難な**事象**もあるのだがこのことは**当事者**である「私と公安の担当者」がはっきりとお互いに**認識している事**でもある。

ごく一部の当事者しか知らない**真実**なので連中は**高笑い**しているだろうが。

私に対する弾圧が**巧妙**にどの程度のことまで行われているか、あるいは**ネット上**の創価や公安の「被害者」と**称し**自作自演(なぜあれほど大量の偽物同志がリンクしあって病気の様な被害者のふりをしているのか。)をしている惨状も含め、今は表面上は穏やかなので気付くことはないだろうが、もしも**一部の本物**のジャーナリストたちが「**真相**」を**万一でも**知る機会があるならば、**腰を抜かすような状況**になっていることに**気がつくかも**ね。私の目の黒いうちは無理かもしれないが。それでもいつか**必ず**「腰を抜かす日」が来るはずである。

週刊ポスト連載の4月27日号「化城の人」のなかで創価の布教活動に伴う**狂信的、暴力的**な一面、そして**日本共産党**との関係についても書かれている。

**攻撃的で熱狂的で**「嘘も言い続けていれば真実になる」という**絶対的な**親分の言葉を信じ現世利益追求のこの団体が**ネット社会**の今の時代なら**ネット上で**どういう活動を行うのか想像に難くない。

公安警察による**自称被害者**がなぜ創価職員なのか、**共産党との関係**がヒントかもしれない。対立構図のからくりを念頭において考えなければならないが。

「化城の人」は創価の**清濁**両面をかつてないほど公正に丁寧に検証した**画期的**な本になるかもしれない。同時に**結果的に**Xデー後の創価擁護の本になる可能性もある。

一番悪いのは**3代目親分**だけなのだと。

「稲葉事件」の稲葉圭昭元**警部**とは、北海道門別町出身で札幌の北海高校から東洋大に進学し、どちらもスポーツによる推薦入学で、道警の警察官に採用されたのは柔道による**体力採用**であった。柔道の腕前ははずば抜けており、どんなに腕っぷしが強い暴力団組員と

喧嘩になっても稲葉に勝てる者はいなかったといわれている。本来なら彼こそ**警察官**にふさわしい人物だったのかもしれない。

拳銃や覚醒剤の摘発により**80回**以上も**本部長賞**を授与されているエリート警察官といわれていた。

しかしその実体は、「札幌市内に**3戸**のマンションを所有し、他にマンションを**1棟**所有し道警から捜査用と称して更にワンルームマンション**2か所**与えられ、**シボレー**や**ポルシェ**に乗り、ハーレー・ダビットソンを**3台**所有し、銃器対策課の婦人**警官**と**刑事**を2人愛人にし同時に**3人**の愛人(織川氏の本では**8人**)を持ち、ススキノの暴力団の組長からは「**兄弟**」とよばれ組員からは「**親父**」とよばれた暴力団の幹部のようなシャブ中の**現役警部**が、市民を守り法律のもとに正義を実現する北海道警察に所属し、道警本部にはまともに出勤せず、フレックスタイム制とうそぶき、警察**手帳**を持った**ヤクザ**がその権威をちらつかせてススキノの飲み屋に出入りし、**捏造**捜査で拳銃や覚醒剤を**S**に密輸させ自らも**密売**し使用していたのである。」

とこういう風に簡単に書いてしまうと、稲葉元警部の**悪党**ぶりだけが際立ってしまうのだが、しかしこのモンスターを**生み**、そして**育てた**のは北海道警察という警察組織であり、「ヤクザの親分のような生活をしていた**あぶない**稲葉」を**黙認**していた道警の幹部達は稲葉の「首なし拳銃」の押収実績により出世し自らも違法捜査に関わっていたのにほとんど責任も取らずに稲葉だけに**責任**を押し付けて決着を図ったのである。

いや幹部の中にひとりだけ**責任**として自殺した(**させられた**)人物がいる。「方川東城夫(**かたがわとしお**)警視」である。

本当の**モンスター**は実は稲葉ではなくその気になれば人間を「**生かす**」ことも「**殺す**」こともできる「**警察**という**権力組織**」である。

後に(稲葉の論告**求刑**の前に)、責任を感じたかどうかは不明だが当時の銃対課長のI氏が**自己都合**で退職している。

稲葉の**実像**については曾我部氏はこう書いている。

『稲葉という人物が**単純**で、上司のために**必死**で実績を残した警察官であることには疑いの余地はない。だが、稲葉の不正による**罪**を一緒に**被る**勇気のある上司は**ひとり**もいなかった。稲葉を**踏み台**にして出世していった上司は数多くいるのに、彼らは稲葉の逮捕後、**必死**で沈黙を守り続けている。』

『稲葉の人物像をひとりの**不良警官**として見るのは**誤り**だ。稲葉は紛れもなく**上司と組織**によって作り出された「稲葉」という警察官を**演じていた**に過ぎない。稲葉自身が警察での取調べで語っている、**自暴自棄**になり覚醒剤に**手を出した**ということについて、もう一度**考えてみるべき**だろう。』

## 10. (方川警視の死) **【警察の組織犯罪】**

2002年7月31日、稲葉の元上司である「方川東城夫警視(56歳)」が自殺した。稲葉の逮捕から21日後である。

単身赴任先の釧路方面本部から**監察官室**の取調べを受けるため29日には札幌市南区の自宅に帰宅していた。上司といっても方川と稲葉の間には直属の上司が2人いる。正確には方川は銃器対策課の**指導官**で階級的距離がある。

方川の死に関しては**監察官室**の**取調べ**がポイントになっている。

方川を知る現役警察官の多くが「方川さんが死ななければいけないなら、方川さんより**上の人も何人も**死ななければいけない」と語っている。

誰に訊いても方川は気弱で部下には優しい人だったと口を揃えて言う。

札幌市南区の藻南公園の公衆便所の中で監察官室が**理想**とするかたちで死んでいた。道警**本部**から動員された警察官が第一発見者である。「自殺する、と簡単に**想像がつく**ような取調べをしていたということだ」と弔問に訪れた別の警察官が語っている。

そして方川の**元同僚**からの情報が入ってきた。

「初日(30日)の取調べの後、方川さんが道警本部のある課の前を通ったところ、その**課長**が方川さんをつかまえて『お前なんか死んでしまえ!』と**罵声**を浴びせた。誰もが方川さんより**上の連中**に責任があると知っていたから、どうしてそんなことを本人に敢えて言うのか理解できなかった。怒鳴ってたのは**稲葉**と関係が深い奴だった。」

「**初日**の取調べ後に帰宅して家の中で自殺**未遂**をした。奥さんが発見して一命を取り留めたそうだ。

奥さんが心配して監察官室の**室長**に事情を電話で伝えた。それで監察が**翌朝**(31日)、**迎えの車**を方川さんの家に出すことになっていたのだがなぜか**車がこなかった**。それで方川さ

んはバスに乗って本部に向かい、その途中で降りあの藻南公園である。迎いの車を故意に出さなかったのか、連絡ミスなのかは不明である。」

未然に防げるはずの自殺を取って防がなかった。自殺することを知っているの不作为である。

稲葉の上司や道警幹部の中で方川一人に道警の闇を背負わせるために、組織の意思が明確に方川を死に導いたといえる。

『監察官室が取り調べるべきは道警本部の歴代の銃器対策課長や暴力団対策課長である』と著者は述べている。

当時の現役警察官は語っている。「マスコミは歴代の銃器対策課長を徹底的に取材して奴らに辞表を書かせなければいけない。銃対の指導官が全ての権限を持っているような誤解があるが、実際には大きな銃器摘発事件(石狩湾新港での泳がせ捜査?)の場合には本部長まで情報は上がっている。方川さんは辞表を書かなくて済んでいる奴らに殺されたんだ」

1997年2月に3人組の男により札幌市豊平区の暴力団組長の自宅から現金6000万円が入った金庫が強奪され、留守番の組員が拳銃で殴られた強盗致傷事件があった。

主犯格を稲葉が逮捕したのだが、この男の供述から「稲葉が事前にこの強盗計画を知っていた」というものだった。また「拳銃の押収に繋がらないので強盗の後に車の中に何者かにより拳銃が置かれていた」という供述もあった。

警察官が強盗計画を知っていながら未然に防ごうとせず、拳銃を実行犯の車の中に仕込み拳銃所持事件として逮捕し、強盗致傷を余罪として立件しようという魂胆である。

車に拳銃を仕込んだのは渡辺で稲葉は強盗の幫助をし、拳銃押収の成績を優先したといわれていた。

稲葉は近著「恥さらし」の中でこの事件の関与について強く否定している。犯人逮捕の際車で150メートルも引きずられ命の危険もあったと証言している。しかし「天地神明」に誓ってというフレーズは朝青龍などの八百長力士たちがよく使っていた言葉でもある。

嘘や誇張、デマや大げさなでっち上げがよくあることは私もわかっているし、一度レッテルを貼られてしまうとやることなす事、あることない事全てをおしつけられ、一度の失敗や不正ですべてを不利な方向に決めつけられ、でっち上げられる。いくら真実を説明しよ

うとしても理解されない、自分の力ではどうしようもないその**理不尽な**苦しさや、**怒り**も十分に私は**理解**できる。

報道された当時は、事件の**裏事情**など知る由もないが、暴力団**組長**の自宅に**強盗**に押し入るといふ怖いもの知らずの奇妙な事件とは思っていた。稲葉事件は知らなくてもこの事件を知っている道民は多いだろう。

結局複数のタレ込みによって稲葉は**監察官室**の取調べを受けることになるのだが、いとも簡単にかわしてしまう。**具体的**な疑惑があり逮捕者の**供述**もあったというのに生き延びている。著者は稲葉が**強大な影の力**によって守られていたと推察している。

拳銃押収実績の高い稲葉を**庇う**道警幹部が**複数**存在したということである。

この事件では当時稲葉を**告発**した暴力団組員が**拘置所**で謎の**死**をとげているのだが、**死因**や詳しい経緯は明らかにされていない。「渡辺司の死」の5年前の事である。

監察官室の取調べは非常に厳しく「お前が**ぶら下がれば**組織が守られる」ということを平然と言う。

誰かが自殺してくれれば、それで一件落着にできる。**全ての責任**を抱えて死んだというのが一番わかりやすい決着の仕方というわけだ。

ある道警OBによると**監察官室**が警察に存在する理由は、警官の不幸事や悪事を正すためではない。どうやったら世間が**納得**してくれるか、どうやったら事件の**印象**を小さいものにできるかという**組織防衛**のためにあるのである。

稲葉は**組織防衛のため**監察官室の取調べを**免れ**、方川警視は**組織防衛のため**監察官室の取調べで**死**を誘導されたのである。

## 11. (証人「渡辺 司の死」) **【警察の組織犯罪】**

2002年8月29日午前6時30分頃に15分おきに巡回している拘置(支)所職員により「変死」しているのを発見され、札幌拘置所長による記者会見では、なぜか**拘置所によって**自殺と**断定**された。同時に、司法解剖も**実施しない**と発表されたのである。

『喉の奥に靴下を押し込み、さらにもうひとつの靴下を歯ブラシの柄(織川氏の本では歯ブラシと割り箸)で首に巻き込んで、布団の中で**仰向け**になって意識を失っていた。』



これが発見された時の渡辺の最後の姿である。自殺とすれば相当な力と覚悟が必要な死に方である。靴下を喉の奥に突っ込みほとんど窒息状態なのにさらに自分の手で自分の首を締めあげるといふ大変な死に方である。苦しさを我慢してどこまで締めあげが可能なのか。素人考えでは完遂前に確実に気を失って失敗すると思うのだが、専門家はこの死に方をどう判断するのか。

曾我部氏は2人の法医学が専門の医師に取材している。一人には直接会って、二人目の教授には電話で取材している。

証人「渡辺司の死」について内容を原文のまま掲載する。

### (一人目の医師の見解)

『私の疑問は簡単だった。人間が自分の手で自分の首を絞めて死ぬことができるのか？ということだった。医師はたまたま法医学教室の空き時間だったと見えて、興奮気味の私の言葉を冷静にメモしながら、やや暫く考えていた。「死ぬるのか死ぬないのか、という点については、死ぬる、という答えでしょうね。実際に喉の奥に異物を詰め込んで死ぬ自殺はあります。あるというのは一般的だという意味ではなくて、私が検死をした症例の中に一件だけありましたから。だから否定することはできません。本件場合はハブラシの柄や割り箸など棒状のものを鎖骨や下顎骨に引っ掛けるようにしながらうつ伏せになり、自分の体重を重しにしたというのであれば、死ぬます。』

私が言葉を失い、呆然として医師の眼を見ていると、彼は視線を逸らしてこう続けた。

「でも、かなり大変な死に方だ。よほどの決意がないとこんな死に方はできない。可能か不可能かという質問に対しては可能。普通の人間ならば無理でしょうね。

喉に異物を押し込んで、さらに靴下を自分の力で巻きつける。五～六分で酸欠になり、脳死状態になります。その後、呼吸が止まり、心停止となる。個人差があるにせよそれまでの時間は十～三〇分。医学的には脳死の段階で死亡したということになるんですが・・・」渡辺の死体がうつ伏せではなく、仰向けだったことを私は再度伝えた。

「それはかなりの確率で不可能でしょう」

医師は私が伝えた渡辺の死亡状況に間違いがあるのでは、というような懐疑的な顔で私をやや暫く見つめた。』

### (二人目の教授の見解)

『その後私は事務所に着いてから、ある大学病院に在籍する**法医学の教授**にも電話を入れた。彼は匿名を条件に、私の電話でのインタビューに応じてくれた。同じように私が知りうる限りの「渡辺の**変死**」についての**状況**を説明した。電話の向こうで長い沈黙が続いていた。そして法医学の教授は咳払いをしてから話しはじめた。

「このようなケースの場合、特定の方からのインタビューにお答えすることは不適切だと思いますが、**以前に似たような死体を検死**したことが一度だけありますので、絶対に私の名前を出さないことをお約束いただくという前提で説明させていただきます。

あなたがおっしゃった『**死に方**』は**可能です**。ただし、**条件がたくさん**あります。**下顎骨**や**鎖骨**に確実に靴下を巻き上げている棒状のものを固定する締め方を、死のうとする本人ができるということ。そして、苦しさの余り体を**移動させない**ことが可能である状態であることです。普通の人ならば**脳死状態になる直前**で大胸筋と胸鎖乳嚙筋が大きく**痙攣**して、固定していた棒状のものが勢いよく**戻ってしまいます**。

そのようなことが起きると知っている人であれば、そうならない環境を設定することができますが、妙な言い方になりますが、**はじめて**このような方法で死のうとする場合は**必ず一度は失敗**します。拘置所の独房内ということでしたが、**一五分毎の巡回**が**適切に行われていれば**最初の失敗で**必ず発見**する事ができます。

私が同じケースの死体を検死したことがあると言いましたのは、同じような状態ではありますが、**上から本人以外の人間が押さえつけていたから可能**だったのです。

死後硬直後に解剖をすると、胸部または背中から**圧迫**が加えられていたかどうかを**生態反応**によって**確認**することができます。」

渡辺の死体は**司法解剖**されないことになっていることを教授に伝えると、電話の向こうでまた沈黙が生まれた。そして教授は「それじゃ、**わかりません**」と言って、電話は切られてしまった。』

『稲葉事件のキーマンである渡辺の変死。それは「**警察の秘密**」を知っている者の死でもある。稲葉と組織の犯罪を告発しようとしていた渡辺が、自ら死ぬ理由は見あたらない。彼の目的は逮捕されることによって、刑事裁判という公の場で**稲葉と組織**を告発することではなかったのか。

ひとつの目的だった稲葉は渡辺の告発により逮捕されたのだから、あとは**公判を待つ**だけではなかったのか。

札幌拘置所によって自殺と断定され、テレビのニュースですでに「渡辺の死」の一報は流れていることだろう。渡辺の死を歓迎しているのは道警だけではないか。渡辺の死によって道警の間は藪の中へと投げ込まれた。』

稲葉はマンションと拘置所と2度自殺を企てたがどちらも未遂で助かっている。渡辺は確実に一回で息のない状態で発見されている。

「恥さらし」のなかで稲葉は服役経験のある渡辺が、刑務所仲間から自殺の方法を聞いて知っていたのではと推測している。

## 12. (密室) [警察の組織犯罪]

「稲葉事件」では稲葉の公判前の不自然な「証人の死」が様々な憶測をよんだ。重要証人なきあとの11月14日の第一回公判から傍聴席との境目に、高さ1・8メートルの透明アクリルの防弾壁が設置され、過剰ともいえる警護の仕方である。誰が裁判所に銃刀をもちこめるのか。暗殺を匂わせて稲葉の証言がさも重大であるかのように印象付ける見え透いたパフォーマンスではないのか。

『金属探知機や防弾壁、暴対の刑事などの演出によって醸し出される物々しい雰囲気は麻原のオウム裁判よりも異様な光景だった。』

元々稲葉よりも事件を発覚させた「渡辺の証言」のほうが重要な意味があったはずである。

真相をはぐらかしたり、わかりにくくするために警察に限らず権力を握っている側は昔からこういうことを恥ずかしげもなく行うのである。

稲葉の証言も重要ではあるがせいぜい幹部の関与した「道警」の不祥事で決着させることができる。公判前の稲葉にはまだ幹部の関与を証言する雰囲気はなかった。警察庁が危惧するのは他の府県に同様なケースがある可能性や広域暴力団を媒介として覚醒剤が全国に流通している大きな原因のひとつが「警察」にあるという事実?が公にバレることではないのか。

織川氏の本によると遺族の側での「司法解剖」の申し出に「ご自由にどうぞ」と拘置所側が自信たっぷりだったそうである。これはあくまでも織川氏の表現である。自殺と断定す

るには早計である。誰もが口封じを疑うような状況で、さらには極めて珍しい死に方である。当然のごとく「道警に消されたのではないか」と関係者の間では囁かれていた。

自信があるなら、何もないなら疑惑をもたれないためにも(拘置所側が自らすすんで)、「司法解剖」は最低限やらなければならない義務である。規則があろうがなかろうが常識的であたりまえの対応だろう、疑われるのはわかっているのだから。司法解剖をすると体表や体内に何かマズイ痕跡でもあるのか。

「独房内だから自殺以外はありえない」という管理者側のまるで子供だましのような理屈である。「独房内に外部から人は入れない。だから他殺はありえない。」という拘置所側の何らかの「協力」が絶対になことを前提で言っている。

疑えばきりがなく、一般的には拘置所の内部の協力を疑うことは無理のある推測かもしれない。しかし「渡辺の証言」によっては警察組織が未曾有のダメージを受ける状況である。

「警察組織は悪い事を取り締まる機関だから警察は悪い事をしない。警察組織を信用しなさい」。これと同じ理屈であると私は思っている。

全国の警察組織の国民の信頼をほとんど失いかねない緊急事態である。

「突出した稲葉個人の事件」として決着させるのがベストなのだが、道警の組織的な関与がすでに疑われているので最悪でも「道警」までとしたいところである。

仮に一部のジャーナリストが騒ぎ、後に事件全体の暴露本が出版される事態になっても、警察組織の深刻な問題として裏金問題に国民の目を向けさせれば、追及もそこまで警察組織として壊滅的なダメージをうけることは、ほとんどない。

問題は稲葉の犯罪の全てを知り、「ヤラセ捜査」、「おとり捜査」の事件の捏造に対して道警の幹部たちがどう関与したのかも知りすぎており、さらには他府県にも関与の影響が及ぶような事を公判で証言しようとしているS(道警の捜査協力者)「渡辺 司」の存在である。

警察側に見れば大麻や覚醒剤で前科のあるチンピラで、虫けらのような人間である。渡辺はハルシオン(睡眠薬)の常習者で精神的に不安定だったといわれている。

北署に出頭する前から方川氏には「道警の秘密をばらす」と脅しの電話を何度も入れてたそうである。

小樽での稲葉たち犯罪集団を利用した「おとり捜査」をした方川氏を含む道警の幹部たちが悪いのか、それをネタに脅した渡辺が悪いのか。どちらでもいいのだが、稲葉によると渡辺は悪党のようである。(世間一般からみれば事件に関わって逃げおおせた道警幹部達は大悪党で稲葉は悪党でさしずめ渡辺は小悪党だろう。)

渡辺の悪事を、ワルぶりを強調すればするほど「死んで当然の人物」という印象をあたえているようにみえる。

警察内部的にも「消される事」に同情や「罪の意識?」を感じさせない口実になっているのではないか。

渡辺のような悪党によって幹部や本部長に責任が及ぶようなこと、道警や更には全国の警察組織が根底からぐらつくよう事をペラペラと公判で喋られてはたまったものではない。こうなるとさすがに隠しようがなくなり、問題が大きく展開していくのは明らかであり、道警の幹部も把握してない警察組織を揺るがす衝撃発言が飛び出すかもしれない。道警に忠誠を誓いひとりで事件を背負込んだ稲葉の口止めは簡単だが(第3回公判から幹部の関与を実名で証言し始めたが道警は無視。)、覚悟をきめて公に証言するために暴走している渡辺の口止めは不可能である。

稲葉は検察官による屈辱的な取調べ(女性警察官と何回セックスしたんだよ!などという罵声を浴びていた。)を受け入れ、組織的関与を隠蔽するための筋書きにも同調していた。

《初公判での罪状認否で「間違いありません」と稲葉が言った瞬間から道警と検察はずでに勝利したかのごとく》とある

しかし(第3回公判の証言で稲葉を起訴した札幌地検が真実を隠蔽し事件を稲葉個人のものに仕立てていたことが初めて公式に露顕したのである。)

9月11日から始まる公判に出廷して証言しなければ、稲葉警部個人の犯罪を色濃くして幹部たちの関与や道警の関与の度合いを薄め、警察組織としての犯罪や隠蔽の事実をうやむやにできる。結局稲葉は公判で道警幹部の関与を告白したのだが、道警側が認めることなく全て無視されてしまう。

しかしこれは渡辺が変死してから何ヶ月も後の公判の話である。



(稲葉は**服役後**道警銃対課の違法なおとり捜査について獄中から**幹部4人**を**偽証**容疑で告発しているが、札幌**地検**は4人を**不起訴**にしている。)

公判まで10日ぐらいしかない。渡辺の証言がなければ事件が拡大することはない。

「相手は生きるに値しない**虫けら**である。こんな虫けらか**ゴミ**のような**悪党**に警察組織を掻き回され潰されてたまるか。」そう考えても不思議ではない。

証人が消滅して「**道警の秘密**」が洩れなければ世間にどう思われようと「証人の死」に**疑惑**をもたれたってかまわない。日本人には忘れやすい**特性**がある。マスコミが追及しなければ数か月もすれば証人のことなど忘れられてしまうだろう。

独房内というのは最も疑われにくい場所である。しかしながら同時に外部の目を気にすることなく、だれにも邪魔されずに最も実行しやすい場所でもある。拘置所側の**司法解剖**しない理由が「**独房の中だから**犯罪性がない」である。

これは**たとえば**、「**外部**からは独房内に**一般**の強盗が入ることがない」という程度の意味でしかない。

そもそも独房内で**既に**息のない渡辺を**拘置所側**でかってに自殺と**断定**していることが非常に不思議なことである。法医学の専門家は「**警察権**のある者と**医師**または第二の医師の**立ち合い**のもとに検死されて、自殺であるかどうかという**断定**がされる。」という。この通常の**手順**を拘置所が知らないはずがない。

「**隠蔽**」工作が**内部**の**協力**のもとに組織ぐるみで**閉鎖**された空間で実行された場合発覚する事はまずない。

### 13. ( 興味深い話 ) **[警察の組織犯罪]**

興味深い話が紹介されている。**なぜか**渡辺の**担当**弁護士ではなく、札幌在住の**人権派**弁護士のもとに事件の**背後関係**を相当詳しく知っている匿名の者から「渡辺司を助けてあげてください。彼は道警の不正を全て知っています。このままでは**初公判まで命が持ちません**。」という**懇願**の手紙が届いていた。曾我部氏に渡された手紙のコピーによるとこの匿名の人物は稲葉や渡辺の事件に関することだけでなく、**検察**と道警の**内部**事情に相当詳しい者であるという。

著者のこの手紙の内容に関する印象は『**検察と道警が稲葉の公判で渡辺を証人として出廷させないための策略**を練っているような予感がする』とある。

後に著者にも**同じ匿名**で手紙が届くが「ある**具体的な理由**で殺されるかもしれない」ことを冷静に伝えようとしている。

結局**著者の予感**どうり渡辺が証人として出廷することは**永久**になくなったのである。

著者には差出人の見当がついたようだが確証はないとある。

おそらくT警官ではないか。渡辺の自爆テロにあたって側面からアドバイス、あるいは後押ししたのではないか。逮捕された際、いわば**犯罪仲間**の警察に話したところで握り潰されるのはわかってるし警察、検察の力が及ぶ**留置場**では安全ではないと考え、法務省管轄の**拘置所**なら安全と考えたのではないか。そのため実際に**判事の前**で勾留質問に答えるかたちで**2時間**にも及び稲葉と道警の組織的な犯罪や不正の**爆弾証言**をし、それにより**稲葉は逮捕**された。あとは拘置所で9月11日の稲葉の**初公判**を待つだけであった。

しかし現役のT警官は道警本部内の動きや情報で拘置所の独房も**安全ではない**ことに気があわてたのではないか。

最も安全と思われた場所が実は最も**危険な場所**であることに気付いたのではないか。

渡辺の変死後、T警官は落ち込んで**後悔**しているようだったが、何を後悔していたのかは明らかにされていない。匿名の人物がTであるというのも私の憶測である。

元妻に宛てた**9通**の手紙を読んでも元妻と自分の**娘**への強い思いが感じられ、特に幼い娘は**生きがい**のような存在になっている。投函されなかった**10通目**の元妻への**最後の手紙**でも、**自殺**を感じさせるような文言は見当たらない。**刑期**の件で落ち込んではいても**次回**の手紙の便箋の**枚数**を気にしているくらいである。

#### 14. (変死?) **【警察の組織犯罪】**

**死の前日**に6通の手紙を彼の妻以外の関係者に宛ててを出しているのだが、遺書のようなものではなく迫りくる「**恐怖**」を語っている。

私は「**実行する**」側の「自殺に**見せかける**」タイミングとしてはこの手紙を出した直後が最適と考えているのだが、「**自殺**」もまた同様に根拠があると考えられる。

いずれにしても著者はこう書いている。

『渡辺が書いた手紙を読めば、彼が発端を作った稲葉警部による事件の全貌の裏に、より大きく**厄介な組織が関与**していたことに**容易に気づく**。事件は私が取材しながら想像していた規模よりも**はるかに**大きなスケールだった。稲葉と犯罪集団が道警幹部たちから庇護されていた背景には道警だけではなく、“**他府県の警察本部や警察庁**までが関わっていた可能性”を拭い切れない。』

『道警本部が単独で稲葉の不正を容認していただけにとどまらず、**全国的**に稲葉や稲葉と同じような役割を担っていた者たちが**複数**いたのではないか、また彼らは**国家的に仕組まれた不正**を遂行するために、拳銃や覚醒剤の**密輸入**をしていたのではないのか、という恐ろしい想像が湧く。』

道警だけでなく警察庁が隠蔽したかったのが何か稲葉事件の本当の問題の**核心**の様な気がする。稲葉事件で**表面化した**稲葉や道警の幹部たちが直接、間接に主導し関与した捏造事件、ヤラセ事件は知られているだけでも少なくとも5件はあるのだが、ほとんどの一件一件の事件が全国紙に載るような内容の濃い**悪質な**事件ばかりである。このことだけでも警察の**重大な組織犯罪**なのだが、当時バレずに表面化していない事件もあるはずで、どこかのマスコミも嗅ぎつけていない悪事をわざわざ明らかにするバカはいない。

「学校のいじめ**死**」さえバレなければ学校側と市教委で相談して隠蔽してしまう。公的機関での**保身**のための隠蔽は特に珍しいことではない。

北海道警察に**限定**の稲葉事件がまだ**序の口**の可能性すらあると私は思っている。

稲葉と警察庁で思い起こされるのが「**50号事件**」であるが、700丁以上の行方のわからない拳銃は結局どうなったのだろうか。

道警の場合は稲葉が目立ちすぎ、そのうえに**Sである**渡辺のいわば**内部告発**という**有り得ない事態**により発覚しただけで、組織的な不正がもし行われるとしたら全国の他府県ではもっと冷静に絶対にばれないよう注意深く静かに行っていたはずである。

稲葉事件の悪質さに比べればまだましな裏金問題であっても全国の警察で行っていたように、警察組織の**運営の仕組み**は同じなので規模や内容はちがっても何処の警察でも**不正の温床**は道警と同じのはずである。

内部的な**隠蔽処理**が遅れさらに**偶然**が重なって「稲葉事件」が発覚したにすぎず、道警ほど酷くないにしても、似たケースは他県でもあったはずである。

そうだとすればマスコミを巻き込んでの「稲葉個人」と「道警」**まで**で事件を収束させようとした当時の一連の状況が納得でき説明も可能である。

なぜあの**時期**に「不正経理問題」が**道警で最初に**発覚したのか。なぜメディアやジャーナリストたちが「稲葉事件」を**徹底的に**追及しなかったのか。当時テレビ朝日でも稲葉事件をとりあげてはいるが徹底的な追及はしていないはずである。

著者のいう恐ろしい「**想像**」がぼんやりと輪郭があらわれた時点でメディアは恐ろしすぎて追及をやめるかもしれない。そんな現実を国民は知りたくもないだろうし、知る必要もない。

いわば**裏**社会のことで、別に真相を追究しなくとも**表**社会の生活にはほとんど影響のないことである。私も確証があるわけではないが。

「稲葉事件」の最も重要な証人の死について

曾我部氏は渡辺が「逮捕**後**の更なる**脅しと恐怖**」で死に至った可能性を推測している。

『**非物理的に他殺された**』あるいは『渡辺が自分の意思に反して死を選択しなければならなかった、という意味において、それは自殺ではなく「**変死**」なのだ。』と表現している。

私は**直接的な他殺**を疑っているのだが、しかし少なくとも死に至ら**せられた**ことは事実である。公安警察を含む**警察組織全体の危機**であり、国民の信頼を根底から覆す状況である。ある意味国家の危機でもある。国家の安定を損なう者は**排除**する必要がある。当時の「渡辺司」などは警察権力側にしてみればまぎれもなく**超「危険人物**」であったろう。表面化してしまったので合法的に解決できればベストであるがそうでない緊急の場合もあるかもしれない。

直接的に手をかけることなく死に至らせる**究極の完全犯罪**は「自ら死を選ばせること」なのであるが、国家権力の**象徴**ともいえる秘密警察が属する警察機関が組織として**前代未聞**のダメージをうける、工作を画策する猶予のない**緊急事態**の場合はどうするのだろうか。政治にさえ巧妙に介入するこの工作機関が手をこまねいてだまって静観しているとはとても思えない。

**公安警察**は『**国家を陰で牛耳っている**』と表現していた本があったが確かに**的確な表現**である。そしてこの点については正しいと思う。

最近では中国大使館 1 等書記官のスパイ疑惑について、ある週刊誌は「典型的な**公安当局**による**リーク報道**」としたうえでこう書いている。

「不自然なのはスパイ活動の核心が判然としないまま、書記官と接触していた**政権中枢の政治家の名前**が次々と漏れ、報道されていることだ」。 **公安により野田政権**に対し揺さぶりが行われているようだ。

又、別の見方をしている青木氏は、「公安部から**中国へ**「何をやっているのかわかっているぞ」という**警告のメッセージ**を送ると同時に、めったに注目されない公安の**存在意義**を示そうとした**公安部の論理**が働いている」と推測している。

「週刊誌を読む」2012年6月

「**政権**を揺さぶってる」とか「**存在意義**を示そうとしている」とかこの簡単な記事からも公安警察がどういう機関なのかが明らかである。公安警察とは工作機関でもあるのだ。

公安の場合の「リーク報道」とは**情報操作**の一種なのだと思うのだが

「政治への**介入**」、「公安部の**論理**」どちらも正しい推察である。

公安の活動には**裏の意図**があると考えたほうが正しい。情報を巧妙に操るので裏を読み取るのは簡単ではないが。

特に政治的なことに関しては表向き警察機関の一組織にすぎない公安が**裏で**こんなことまででき、やっているのかと思う人がほとんどだろう。しかし私から見れば、この二つも「公安情報の漏洩事件」すらもみな**表舞台**の話である。

私の“**想像**”ではあるが本当の「ヤバイ話」の詳細が国民に広く知られる事態になれば「公安を解体しろ」とか「警察を一から再編成しろ」ということになるので、裏での巧妙で悪質な違法行為、犯罪行為、**人権蹂躪活動**などの実態が表面化して世の中に知られることはないのである。

現状の体制(情報**非開示**の**秘密警察**)が公安にとってはもっとも都合よく「何でもできる」ので現在の組織体制をぶち壊すような、尻尾を掴まれるような証拠を残したり(ビラ撒き事件のようなパフォーマンスもある。)、あるいは自分達の組織の消滅につながりかねない警察**改革**は絶対に行われなければならないはずである。



ほとんどの公安ジャーナリストたちも**公安の代弁者**や**広報担当者**になっているので、本気で公安批判をしたり公安警察のどこが問題なのか本気で検証し指摘することもない。ましてや「公安警察の**解散**」などとんでもない話なのである。

公安の批判を本や映画で展開している**らしい**一部の人も、本物の弾圧があった時代**以降**の公安と共産党の関係のようにもしかしたら公安のガス抜きの役割を担い、実は公安の組織**存続**に手を貸し協力しているのかもしれない。

そうでなければ公安警察や公安調査庁の**改革**や**解散**がとっくに着手されているはずである。もっともその前に公安の捜査活動?の実態の**全面**情報公開が先であるが。

ジャーナリストや評論家に限らずメディアやマスコミ、**大企業はすべて**、ほとんどの中小企業も皆「**公安警察や公安調査庁の味方**」なので現状でもこの先もまた**公安による**組織的なストーリー問題が解決に向けて**進展**することはなく、これとは別に公安の悪事も**開示**されることもほぼ**不可能**だろう。

道警の稲葉事件のケースでは二人の人間が「死に至る」ように仕向けられ、渡辺の変死については不審な点が多い。

「殺人の究極の完全犯罪の方法は対象者を**巧妙**に自殺に追い込むことである。」

渡辺の死がこれにあてはまるのかどうか、あるいは単純に**大胆**に「**他殺**」なのか?想像の域を出ない。

**捜査協力者**である渡辺のいわば**内部**告発により始まった史上最悪の警察犯罪であり公の場での「証言」を最も恐れていたのは「道警」であり「**警察庁**」であり「公安部」にも大きな影響があったはずである。

稲葉が**捏造**事件やヤラセ捜査の**道警の組織的な関与**を語り出したのは翌年2月13日の第3回公判からで、実に渡辺の変死後**6カ月も後**のことである。

渡辺が拘置所の独房で**恐怖の日々**を過ごしていた時に、道警や警察庁も又9月11日(死後**11月に延期**された)の第一回公判まで**戦々恐々の日々**を過ごすはずであった。

渡辺の**存在**により、**警察組織全体**に間違いなく前代未聞の悪影響を及ぼす**証言**になることだけはたしかであった。

当時のこのような逼迫した状況のなかで、警察組織に自爆テロを企てた渡辺司という「悪党」でもあるこの超危険人物を公安部はどのように見ていたのだろうか。

## 15. ( 羊の群れ ) [警察の組織犯罪]

この国の人々は食品偽装や放射能漏れ問題のように目に見えない、表面化しないとわからないことに対しては、予想したり想像したりしない。そのため、常日頃から物事の裏で何が行われているかに鈍感で「疑う」ことをほとんどしない。

福島原発で3基が既にメルトダウンの状態で大量の放射能漏れがおきけても、テレビに出まくっていた専門家達の歯切れの悪い解説の嘘を見抜けず、疑うことさえしない。政府と東電と原子力専門家とメディアがグルになって情報操作をしているのに国民は怒らず、パニックを防ぐためだったという何ヶ月も経ってからの言い訳にも怒る人は少ない。

あれだけのことがあったのに、偶然あの程度で済んだのに、仮に一時的でも経済活動を理由にまだ原発を続けるというのだから目が点である。人智の限界を無視した「バベルの塔」にまだ懲りない傲慢な人間に対して今度はどこで何が起こるのか。

これを阻止できない我々自身に責任があり、結果的に思い上がった日本人へのやはり「天罰」であったのだ。想定外などとたわけたことを言う人間と黙認してきた我々に対する「警告」でもある。

健康寿命がわずかに70年の思い上がった人間が「数万年」単位の危険物質をコントロールしようというのだから、何世代も後のことかもしれないが「核」に限らずこの先さらにとてつもない「想定外」が必ず起こるはずである。

日本人にどの程度の豊かさが必要なのかわからないが「放射能汚染の恐怖」なしに以前よりは非常に不便ではあっても、十分すぎるほど幸福に生活できるはずである。「大津波」だって実はそうなのだが原発事故に関しても思い上がった傲慢な人間への「天罰」以外言葉が見つからない。東北の人たちが天罰を受けたという意味ではなく、「人間」が天罰を受けたのだと私は思う。

この国の人々は権力や権威にたいしては疑うことなく受け入れ、丸めこまれているのを感じていても黙ってしまい、「ものいうことなく」受け容れてしまう。

未曾有の大津波で壊滅的な被害を受けても「人々は秩序をまもり冷静に行動した」として海外のメディアから「日本人の美德」を賞賛されて皆さん満足げである。

一方で福島原発事故当時の損傷の程度や、放射能漏れの実態についての日本政府の対応をめぐる欧州のあるメディアは「この国は嘘を言う国だ。」と断じ報じている。

日常的に協力者たちの嘘を体験してきた私にとっては偽善のような美德など「くそくらえ!」である。私のまわりで行われている組織的なストーカーは「偶然を装った嘘そのもの」であるからだ。

外国のように略奪や意味のない暴動を起こすのは論外である。しかし私が思うに大多数の日本人は怒りをあらわにして権力に立ち向かうことはしない。怒って言うべきときに「ものいわず」に、従順な羊の群れたちは結局飼い主に言われたとうりの道を歩いて「屠殺場」へと向かうのである。

## 16. (真相?) [警察の組織犯罪]

「恥さらし 北海道警 悪徳刑事の告白」帯には覚醒剤 130 キロ、大麻 2 トン、拳銃 100 丁とある。

9 年の刑期を終えた稲葉氏が 2011 年 10 月 6 日初版の本を出版したのだが広い意味での警察を守るために活動している「裏金問題の大御所」が関わっているこの本に関しては、何か意図があるのではと考えてしまう。

私は稲葉事件を追及するために書いているわけではなく私が稲葉事件を取り上げた理由は(最後に)書いたとおりである。

この本についても取り上げるつもりはなかったのだが気になる点があったのでとりあげてみた。

事件の当事者の本人が書いた本だからすべての真実が書いてあるとは限らない。稲葉氏に限らず人間は弱い生き物で素っ裸になることはなかなか難しい。だれでもそうなのだが、心の中の恥部まですべてさらけ出すことはできないしその必要もないはずである。

表沙汰になっていない誰も知らないマスコミも気づいていない過去の不正や犯罪をあえて語るバカはいないはずだ。暴露してもも差し障りのない範囲のことしか語れないということである。

※ 1997年当時の薬物対策課に勤務経験のある警察官はすでに稲葉の覚醒剤使用を疑っている。

覚醒剤**捜査**のプロだから「体にシャブが入っている奴はすぐわかる」という。

1999年稲葉の腕には、注射**痕**が500円玉ぐらいの大きさに**紫色**になっていたという別の警察官の**証言**もあった。

本当に都合の悪い部分はさらりと流しあるいは触れず、道警の幹部たちに利用されたことをまわりでも**強調**しているが同情を買ってきれいごとでまとめあげているように見える。

「本人による稲葉事件の**最終的な**辻褃合わせの**言訳**本というのが私の印象である。」

正直いって、「暴力団対策の**最前線**にいた刑事の話」としてはおもしろかった。

もし稲葉事件がなかったならば**単純**におもしろく読んだかもしれない。

付き合いのあった「**暴力団組長や組員**」に気を使って「暴力団」ではなく皆「**ヤクザ**」となっていたのが印象的であった。本の内容も「告白」というより「**言い訳**」のように私には感じられたのだが。

歴史に残る迷惑をかけた警察組織を**将来的**に守るために最後の御奉公をしているかもしれない。

「よりよく明るく」なろうとしている警察組織にこれ以上迷惑をかけるはずもなく、道警の幹部達による犯罪の**ほとんど知られている事**、あるいは**新事実**であっても**警察庁**が既に把握している**想定内**の話しか書けないはずである。

原田氏が**元上司**としてかつての部下稲葉氏のそばに寄り添ってアドバイスをしているようなのだが。

**元銃器対策課**のOBの話『原田さんが稲葉事件をきっかけとして**裏金**のことを**暴露**したことになるけど、**仲人**したくらいで稲葉のやったことを**知ってるわけがない**。部長と警部補が事件のことで顔をあわせて話すことなんてないんだから。せいぜい課長くらいがサッと報告してる程度だ』

ではいったい原田氏が裏金を暴露した**本当の目的**は何だったのだろうか。あるいは何か別の役割があったのだろうか。

『銃対課にいた頃、一番多いときで**アジトの保管庫**に拳銃は**100丁**ほどありましたが、このときは銃対課を離れて**大部分を処分**していたので、PSMだけになっていました。』

「恥さらし」

※ 現役警官からの逆タレこみを曾我部氏が裏取りをしている。稲葉氏が**他人名義**で借りていたマンションの張込みをして1週間目の夜に**6台**の高級**外車**が集まり、総勢**12人**の暴力団風の男たちがマンションに出入りしている。

1時間後に出てきたときにはそれぞれ両手に2袋ずつ、全部で24袋をそれぞれのトランクに4袋ずつ積み込んでいる。

『警察官の情報は**正しかった**。このマンションに**何かを集積**しておいて、今日6台の車に分散して積み出したのだ。稲葉が逮捕された7月10日から23日までの間に、中央区の藻岩山山麓の稲葉の自宅となっていたマンションから移動した「物」がこのマンションに集積されている、という情報は正しかった。』

万が一に備えて4台のメルセデスと2台のワゴン車のナンバーは全て**偽造**である。それほど**危険な「物」**を運び出したということである。

後日この話を裏付けるように**元銃器対策課のOB**による「小樽より積丹方面。海に向かう国道沿いにある民家の裏山。民家と裏山の間に細い川」のキーワードをもとに、偶然にも稲葉名義で登記されていた所有地で**重金属探知機**を使い埋められている場所を特定できたのだが、先を越されて掘り返されている。

著者はすでに現地に向かう際に**Nシステム**やパトカーにより道警の監視下にあったと書いている。見つけられては「**こまる物**」を捜す途中で、尾行のパトカーにスピード違反で捕まっている。

**8km超過**でスピード違反で捕まるのも珍しい事なのではないか、私は聞いたことがないのだが、北海道の幹線道路では「車の流れ」があるなかで、この程度で捕まえていたらほとんどすべての車が違反になり捕まえなければならない。

警察の牽制なのだろうが、「よけいなことはするな」という**警告**であろう。

私は曾我部氏の考えをすべて全面的に支持をしているわけではないが、アジトの拳銃の件に関しては稲葉氏の告白よりも信用できるのではないかと。というより「**白の真実**」に書かれていることが**事実であると考えている**。だとすれば当時100丁以上の拳銃が暴力団の手に渡ってしまったのではないのか。

もし大量の拳銃が暴力団に渡ってしまったならばそのことだけでも重大な事なのだが道警側は稲葉のアジトにあっては「**こまる物**」を、稲葉事件がさらに拡大することになる証拠を**家宅捜索の前に暴力団を介して**消し去ってしまったのである。



## 「警察庁登録五〇号事件」

通称「五〇号事件」とは1996年から98年の2年間に及ぶ拳銃摘発のための警察庁を中心にして千葉県警、警視庁、北海道警による合同の広域捜査のことである。

96年千葉県の暴力団組織が800丁のブラジル製拳銃ロッキーを南アメリカからのルートで国内に密輸入した事実を警視庁が察知したことに端を発している。

拳銃の出どころを調べ大量の銃の保管場所を突き止めるのがこの時の捜査の目的である。警察組織の自作自演も全くないとは言い切れないのでこの話の発端自体がどこまで事実かも怪しいのだが。

道警からは稲葉氏と元暴力団幹部でSである石上の二人が暴力団と取引する囷として参加している。

不正を告発する側と不正に手を染めている側とがそれぞれの立場で主張が食い違うのだがまっとうな考えの警察官と暴力団に近すぎる警察官とが「犬猿の仲」だったとか「確執があった」とかはそうかもかもしれないが、やはり告発する側の警察官にそれ相当の根拠と理由がありだいたい実際に告発した情報どうりの事件であったのだ。

稲葉氏側はSがらみの事件のすべてに自分が関わっているとされているのは、事実と違うと言っているのだが、本当のところは不明である。

どちらかの側に感情移入して同情的になれば真実を見誤ってしまうかもしれない。

いまだにこういう食い違いが出ている事自体この事件の闇のすべてが解明されていない証拠でもある。

曾我部氏は「稲葉氏」を道警幹部たちに利用された組織の論理の犠牲者の面を強調している。

元銃器対策課のあるOBは違う立場である。『あんたは稲葉が組織の犠牲者のように書いていたけど、俺は違うと思う。自ら進んでやったことなんだから、しかも、シャブ売ってまでチャカ出そうとして、結局、暴力団と同じ感覚になってしまった。そんな警察官はいっぱいいるよ。暴力団に内通しているのとか、親密な付き合いをしているのとか。暴力団と付き合いがいい警察官には真っ当な事件なんか任せられないんだ。でも、稲葉には任せってしまった。任せた上司に責任があることは明白なんだけど、そいつらに責任が及ぶことも組織の恥として押さえ込んでしまう。

警察組織では表沙汰になったことだけを問題として扱ってるんだよ。表沙汰にならないことはいっぱいあるんだ。』

私も稲葉氏を庇いすぎのような気がしていたのでやはりこういう考え方もあるのだなと思ってしまった。

服役前に大御所原田氏も稲葉氏を激励している。服役して罪を償うのだから出所したら堂々と胸を張って生きろと。道警が幹部たちの犯罪をいまだに認めず自浄作用のない組織であり、関わった幹部たちがのうのうと定年を全うしたり、現役で活躍しているのに比べれば稲葉氏のほうがまだましである。稲葉氏を利用して出世していった幹部たちは大悪党である。しかし警察権力の威光を盾に結果的に多くの嘘で世間を騙し続けた稲葉氏も当時は悪人であったことにはかわりはない。

国家権力により胸が張り裂ける無念の思いで死んでいった者、これから死んでいく者もたくさんいるはずだ。稲葉氏だけが特別に辛酸をなめているわけではない。

稲葉氏個人は9年間の服役により罪を償ったので、この先とやかく言われる筋合いはないだろう。小さくなって下を向いて生きる必要もないし堂々と生きたらいいだろう。胸を張ってはどうかのかわからないが。

これからは警察権力側の「反面教師」として元道警幹部たちを糾弾しながら「警察改革」を提唱した活動をするかもしれないが、不祥事続きの刑事警察組織の単なる「ガス抜き装置」として利用され腐った巨悪な組織犯罪をますます見えなくしなければいいが。

事件発覚当初の状況と道警側の思惑により「稲葉事件」と個人の名前がついてしまったが主導的役割を果たしていたのは道警の幹部たちで組織犯罪の内容からみても「北海道警察本部事件」となるべきなのかもしれない。

本人やまわりの思惑とは違い、この事件は警察機関による史上最悪の組織犯罪として後世まで語り継がれるはずである。

## 17. ( 闇に葬る ) 【警察の組織犯罪】

曾我部氏は結局「稲葉事件」をどうとらえていたのだろうか。ひとことで表現するのは難しいのだが、「凄まじい腐臭のする警察の組織犯罪」が最も的確な表現なのかもしれない

い。後に表面化したことや当事者たちの証言、告白だけではすべてが解明されたとは言い難く複雑かつ異様で不気味な闇が背後に広がっている。

既にした事と重複するのだが稲葉事件が結局は何だったのか考えるうえで重要なことなので再確認すると。

著者はいくつかの犯罪の密接な結び付きを指摘している。ひとつは警察権力による犯罪、ひとつは暴力団による犯罪、さらに外国犯罪組織による犯罪、『そして、おまけ的事件としてあったのが稲葉警部個人による犯罪だ。』

また「稲葉個人の事件」と見てしまうと、背後にある巨大な犯罪構造と隠蔽行為を見失ってしまうとも述べている。

『稲葉事件が象徴していたのは、拳銃を挙げるために全国の警察組織がより重大な犯罪に対し目こぼしをしていたという恐るべき不作為だった。拳銃の押収実績をあげるためならば覚醒剤取引を見逃し、あるいはその違法捜査に協力した者たちに盗難車などの密輸出を特権的に与えていた。』

最後に警察組織そのものが『事件の全体像を解明されることを恐れ、隠蔽へと向かった事が最大の問題であり、権力犯罪の構図はあまりにも巨大である』と結んでいる。

「警察という巨大な権力組織」がその目に見えない権力を背景にして何をどこまでできるのか。「死に至らせられた」方川氏や「変死」した渡辺氏のように一般の市民が想像すらできない決して表に出ることがない「警察組織の醜悪な裏の顔」があることを「稲葉事件」がわかりやすく示して見せてくれたのである。

『稲葉と犯罪者集団が道警幹部たちから庇護されていた背景には道警だけではなく、他府県の警察本部や警察庁までが関わっていた可能性を拭い切れない。』『道警本部が単独で稲葉の不正を容認していただけにとどまらず、全国的に稲葉や稲葉と同じような役割を担っていた者たちが複数いたのではないかと、また彼らは国家的に仕組まれた不正を遂行するために、拳銃や覚醒剤の密輸入をしていたのではないかと、という恐ろしい想像が湧く。』

著者のこの指摘は非常に興味深い。

「著者が本の中で指摘している警察組織にとっての致命的な巨悪」を矮小化あるいは隠蔽するために、当時の警察機関が「裏金問題」を発覚させ、メディアを巻き込んで国民の注目を逸らしたのならば私のなかでは辻褄が合い理解のできることである。著者は稲葉事件

当時は「想像」と控えめに表現しているが、2007年「白の真実」では『日本を世界一の覚醒剤消費国にしているのは警察組織だ!』とまで断言している。象徴的に述べている「国家的に仕組まれた不正」とはこのことと関係があるのかも知れない。

五〇号事件は稲葉氏の本の中でも潜入捜査についての詳細が語られているが、広域捜査のきっかけである800丁ものブラジル製拳銃ロッキーがまとめて一度に国内に密輸入されたこと自体にわかには信じがたい話である。何か裏があるのではと考えてしまう。

最終的に警察庁が捜査を警視庁に委ねたのだが、当時のS石上(元暴力団幹部)の話ではロッキーの保管に警視庁が運用していたSが絡んでいたという。そのためになぜか道警と千葉県警は合同捜査からはずされ警視庁が単独で捜査する事になる。この時の石上は道警からも稲葉氏からも信頼されていたので「警視庁運用のS絡みの話」は信憑性が高い。そのことと関係があるのか800丁のうち700丁以上の拳銃ほとんどの行方は現在に至るまで「うやむや」のままである。

この構図、後の「道警と稲葉とS」の組織犯罪と同じ構図ではないのか。道警でSを運用する遙か以前から公安部の本店である警視庁が捜査協力者を運用していたことが推察できるのだが、稲葉と同じような役割を担った警視庁の警察官がSを介して大量の拳銃を保管し管理していたのではないのか。ワキの甘い道警と違い公安部の砦でもある警視庁だから絶対に表面化しないのではないのか。とても警察とは思えない「なんでもあり」の「稲葉事件」で明らかになった警察と暴力団の談合関係を考えれば、単に表面化してないだけの「ヤバイ事」がほかにもあるのではないのか。

「北海道警察本部事件」がたまたま海面に現れた氷山の一角にすぎない可能性を考えてしまう。

そして私が思うに実はもっと深刻な問題なのだが、「稲葉事件」では権力を監視するはずのメディアが意図的に正常に機能させず、権力機関に都合のいいように世論を誘導していた事実が見え隠れするのである。この事件を命懸けで追っていた著者がその事実気付、たまたま書き記しているが警察権力が組織として致命傷を負いかねない場合、マスコミが報じていることは情報が操作されていたりフィルターがかけられていたり、まったく隠蔽されている可能性すらあるということである。

ジャーナリストやマスコミが**企業としてのメディアに配慮**したり、都合の悪い「事実」や「可能性」を検証しなかったり、何らかの「報復」や「不利益」を恐れて徹底追及せずに見てみないふりをし、へ理屈言ってタブーに挑まないのなら日本のジャーナリズムは瀕死の状態である。

何のためにジャーナリストや評論家は存在するのか。テレビで**出演料**を稼ぎ、名前と顔を売って著作本の**売り上げ**を伸ばし**講演料**を稼ぐためではないと信じたいが。

『「枝葉末梢の不祥事」に熱弁をふるっているいかにも**良識人のふり**をしたジャーナリスト、評論家は疑ってかかれ。』 **今年の私の座右の銘?**である。

## 偶然の協力者たち **【組織的ストーリーとは】**

### 協力者たちの紹介(順不同)

人間の**クズ組織**に協力し私にしつこく「**偶然**」をやっている想像力の欠如したバカを紹介します。

見かけたら尋ねてみてください。「指示されて**偶然**をやっているか」と。

嘘も平気をつくバカどもなので無駄だとも思うが。

頭の悪い末端の協力者なので「指示」の元締めの子供を知らない可能性もあります。

公安警察かもしれないし、公安調査局が単独でやっているかもしれないし、あるいは公安警察と札幌の道公安調査局がコラボして最高の「国家権力行使」を行っているかもしれない。

ゲスな末端協力者の紹介で私も心苦しいのだが、組織的なストーリーのれっきとした協力者である。

もし札幌で見かけた際には全国に配信されていることも伝えておいてくれ！



# 協力者

2008.4.11

「公安」？ 既に札幌から異動？

